

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース⑤ *

谷口 和久

(前号—2010年10月号—までのあらまし)
 <「自分に合った自転車」を求めて、2009年夏、ヴェローナのズッコ工房を訪れ、フレームをフルオーダーしてきたところまで>

●生粋の自転車職人 ズッコ氏

ここで、自転車工房の主、ティツィアーノ・ズッコ氏の経歴をご紹介します。

1952年、ヴェローナ近郊のスタッラヴェーナという小さな村の生まれで、御年58歳。14歳で自転車レースを始め、約10年間選手生活を送った。その一方で、17歳の頃からフレーム製作の世界にも足を踏み入れ、次第にその腕を認められ、その名を聞けば誰もが知るようなビッグブランドの下請けとして高い評価を得るようになる。

ところで、ここでイタリアにおける自転車職人のあり方について、おおまかに整理しておこう。彼らは大きく3つのタイプに分けることができる。

第1のタイプは、自らのブランドを有し、ジロやツールに出場する有力チームにフレームを供給するような、日本でもよく知られた職人たち。もはや、職人というより、ビッグブランドともいべきもので、エルネスト・コルナゴやウーゴ・デローザといった名は、ロードレースに多少なりとも興味のある方であれば、必ずや耳にしたことがあるだろう。

このコルナゴ、デローザは、一介の職人から叩き上げて、プロチームのメカニック兼サプライヤーとなり、特に70年代に「人食い鬼(他の選手たち

を“むさぼり食う”ように負かしまくったので、こう呼ばれるようになった)」と名付けられたエディ・メルクスという最強のベルギー人選手を支えたことで、今日の名声を確立したのである。



【“人食い鬼”エディ・メルクス】

第2のタイプは、ビッグブランドに所属し、その中で働く職人たち。彼らは、一般ユーザーにその名が知られることはないものの、斯界では知れ渡

った人も少なくなく、彼らの腕がビッグブランドを支えてきたとも言える。

そして第3のタイプが、ビッグブランドの下請けとしてフレームを納入する職人である。彼らの中には、日ごろは自らの名を冠した自転車を地元のレーサーや愛好家たちに販売している者もいる。そして、そういった無名の若手レーサーたちが、いつしかプロとして活躍するようになったとき、それまで乗り慣れた車を使いたい、しかしながらチームのスポンサー契約上、特定ブランド以外の自転車は使用不可、ということになる。で、そうした場合、実際には古くから自分のサイズや癖をよく理解してくれている地元の馴染みの職人に製作を発注し、表面のロゴだけはチーム契約のブランドに書き換える、といったことがまま見受けられるのである。あるいは、ビッグブランドやプロ選手から腕を見込まれて下請け製作を発注されるケースも、もちろんある。

実際、こういった幅と厚みのあるこの国の職人層が、自転車づくりの世界における「イタリア・ブランド」の価値を高めていったのである。

このようなイタリアならではのマニファクチュアのありかたこそが、「基本機能の充実」を実現しつつ、「(イタリア人ならではの、うるさいまでの)個々の要求に対するきめ細かい対応」と、そして言うまでもなく「イタリアならではの美意識」といった、競技用自転車に求められる、ときには互いに相反する条件を高い次元でクリアしてきたわけで、ドイツの質実剛健一辺倒や、アメリカのベルトコンベア式大量生産とは異なる、イタリアの自転車づくりの強みといえよう。

●自転車界に押し寄せる時代の波

さて、ズッロ氏に話を戻すと、下請けと地元愛好家を相手にした小規模なビジネスにも、やがて転機が訪れる。オランダ人の夫人の支援もあり、オランダのプロチーム「TVM」のオフィシャルサプライヤーとしてフレームを供給することになったのだ。TVMは当時ジロやツールにも出場していた有力チームである。彼は1986年より1992年までそのサプライヤーをつとめ、当然その間には知名度のアップに比例して事業規模も拡大していった。一時は従業員10人、年産5000本を誇る規模まで成長したこともある。



【ZULLO を駆る TVM チーム(ZULLO サイトより)】

しかしながら、90年代に入ると自転車ビルダーの世界に二つの大きな波が押し寄せてきた。

ひとつは製造業の中国・台湾へのシフトである。それまで「Made in Italy」を売りにしてきたイタリアのビッグブランドたちも、破格の製造コストには流されざるをえなかった。いわんや小規模下請け業者はなすすべもなく、次々と工房の灯を落としていったのである。

もうひとつには、プロチームとサプライヤーの力関係の逆転である。1994年に刊行された「イタリアの自転車工房 一栄光の歴史」(砂田弓弦著、アテネ書房)によると、1991年を境に、それまでプロが使う自転車は貸与もしくはチームや選手の側が金を払って購入していたものが、逆にメーカー側が「広告宣伝費」としてチームに金を払って自社フレームを「使ってもらう」という図式に変わったのだ。

・ウーゴ・デローザ(デローザ創業者)

「1990年までは自転車だけでよかったんだけど、その後は金も必要ということになった。昔は逆に選手が金を出して買っていたものさ。メルクスだってモゼールだって金を払ってウチの自転車を買っていたんだ」

・ジョヴァンニ・ピナレロ(ピナレロ創業者)

「デルトンゴ(筆者注:イタリアのプロチーム)に供給していた時(~1991年)はフレームを貸与していたけど、今は逆にこっちが金を払わなくちゃいけない。莫大な金が必要さ。だけどそんな莫大な金を払ったとしても宣伝効果は大きいね」

(「イタリアの自転車工房 一栄光の歴史」より)

ちょうどこの時代(80年代末~90年代初頭)は、自転車に限らずスポーツビジネス全体のあり方

が大きな変革を迎えた時期でもあった。

1976年に開催されたモントリオール・オリンピックが、結果的に30年以上にわたって引きずることになる莫大な負債を抱えたこともあり、次のオリンピック(1980年の大会はその時点ですでにモスクワ開催が決定しており、ここでいうのは1984年開催分)ではほとんど候補地が出ず、その数少ない候補地から選ばれたのがロサンゼルスだったのである。

ロサンゼルスのオリンピック委員会は地元の実業家をスカウトし、モントリオール大会の反省をもとに、「稼げる大会」を模索した。そこで考案されたのが、スポンサーの絞り込み、それに TV 放映権の大幅値上げである。すなわち、オリンピックのブランド価値を高め、「世界何十億の人々が注目する広告媒体」として売り出した。最終的には2億ドル(当時のレートで約400億円)の黒字化と、大成功をおさめたのである。

以後、オリンピックは「金のなる木」となり、その余波はサッカーワールドカップやF1、そして自転車レースにも広まった。選手が使用する自転車、ウェア、沿道の看板、そしてチームそのもの、すべてが広告媒体として、それまでとは比べものにならない価格で取引されるようになった。ウェアがスポンサーロゴで余白がないほど埋め尽くされる「耳なし芳一状態」になったのも、この頃からだ。

トレンドに乗った拡大志向か、工房閉鎖か。いずれにせよ、純粋に「ものづくり」を愛する職人にとっては、つらい選択であったろう。そのような時代にあって、ズッロ氏の最終的な決断は、従業員たちを解雇して規模を縮小することであった。工房開設時の原点に立ち返り、自分一人のできる範囲で「フルオーダー“su misura”」対応のものづくりに専心することにしたのである。

●稀少な“su misura”のカーボンフレーム

自転車において「フルオーダー」というと、鉄製のものが一般的である。それは、数ある素材の中でも、鉄のチューブはバリエーションが豊富で、加工もしやすいためである。一方、近年主流となっているカーボンは、一般には金型による生産となる。個別のサイズに対応すると(特に大手メーカーにおいては)コストメリットのない製造方法となってしまうため、ほとんど目にすることはない。し

かしながら、ここズッロ工房では、パイプの上からカーボンを手巻き加工していくことで、フルオーダーに対応しているのである。カーボン素材そのものは、ズッロ工房の近くにあるランボルギーニや飛行機のエアバスの機体を下請け製造している企業のものを使用しているため、その品質は折り紙つきである。



【完成した ZULLO】

さて、発注から9カ月の歳月を経て手元に届いたフレームであるが、ひと言でいえば「無味の味」といえようか。ポジションはもちろんのこと、剛性や乗り心地について、「固い」だの「柔らかい」だの、あるいはカーボンにありがちな「よくなる」といった、自転車乗りがよく口にする何らかの指摘ポイントが一切感じられないのである。実に自然に、何の違和感もなく乗りこなせるフレームである。このような感覚は、これまで乗ってきたフレーム(鉄、アルミ、カーボン)がいずれも既製品であったためか、一度も味わったことのないものである。まさに「きっちり足に合った靴」ということか。最後に残された唯一(にして最大)の問題は「非力なエンジン(=己の実力)」である。さてどうしたものか…。 “人食い鬼”メルクスは、強さの秘訣をこう語った。”Ride lots”。

【参考資料】

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)

『イタリアの自転車工房物語』(砂田弓弦著,八重洲出版,2006)

※筆者注:ズッロ工房の元スタッフ安田氏が正式に日本での取次業務を継続されることになりました。

・ズッロ工房 <http://www.zullo-bike.com/>

・安田氏のサイト <http://www.kinopio.com/>

(当館スタッフ)

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第5回

堤 康徳

前回、カルヴィーノの『投票立会人の一日』(1963年)と、そのなかで使われたアーティチョークの比喩について書いた。この小説のアーティチョークに最初に注目したのは、批評家のアルベルト・アゾル・ローザ(1933年ローマ生まれ)であった。小説の発表された年、早くもアゾル・ローザは、社会党左派の週刊誌『モンド・ヌオーヴォ』に、「弁証法のアーティチョーク」と題された論考を寄稿しているのである。この論考のなかで彼は、当時のマルクス主義知識人(アゾル・ローザ自身もそのひとりだった)の問題意識を広く反映するこの小説において弁証法の原則が徹底的に応用されていると指摘したうえで、次のように書いていた。

すべてがその否定的な面において見られている。なぜなら、すべてがその肯定的な面を表現しているからである。奇形性は人間性を、不動性は運動を、不活動性は行動を回復させるのである(Alberto Asor Rosa, *Il carciofo della dialettica, ora in Id., Stile Galvino, Torino, Einaudi, 2001, p. 39*)。

アゾル・ローザが『投票立会人の一日』に見出したのは、グラムシの言う「意思における楽観主義」であり、人間が進歩し、いかなるものもその進歩に関与するという信念だった。たとえ、その楽観主義と信念は、きわめて用心深く、慎重なものだったにしても。アゾル・ローザは次のように述べている。

弁証法のアーティチョークは、この意味においても十分に機能した。すなわち、控え目ながらも肯定的な展望がつねに開けており、世界は、葉を一枚一枚めくるごとに、何があろうと結局は、前進することを示しているという意味において(*ibid.*, p. 39)。

アゾル・ローザは、興味深いことに、『投票立会人の一日』の主人公、アメリーゴ・オルメーアが、マルクスの『経済学・哲学草稿』とともに、おそらくはそれ以前に、エンゲルスの『反デヒューリング論』を読んでいたにちがいないと書いている。『投票立会人の一日』には、たしかに、アメリーゴが、マルクスの『経済学・哲学草稿』を読む場面があったが、『反デヒューリング論』を読んだとは書かれていない。しかしながら、アゾル・ローザは、『投票立会人の一日』に、エンゲルスの弁証法の影響を見出し、『反デヒューリング論』の次の一節を引用する。

大麦の粒をとってみよう。何十億ものこのような大麦粒は、粉にされ、煮られてからビールとなり、消費される。しかし、そのような一粒の大麦が、それにとって正常な条件を見出し、適した土地に落ちて、熱と湿度の影響を受ければ、特有の変化を被る、つまり発芽する。麦粒はそれ自体としては死に、否定され、その代わりに、それが生み出した植物、麦粒の否定が現れる……(*ibid.*, p. 36)[アゾル・ローザによるエンゲルスの引用は以下のテキストから。F. Engels, *Antidühring, Editori Riuniti, Roma, 1950, p. 149*]

アゾル・ローザによるエンゲルスの引用はここで終わっているが、このあとエンゲルスは、否定の否定として再び得られる大麦粒が、一粒ではなく、十倍、二十倍、三十倍の数で得られると書いている(フリードリヒ・エンゲルス『反デューリング論1』村田陽一訳、大月書店、国民文庫、1996年、210-211頁)。

アゾル・ローザは、『投票立会人の一日』の舞台となった施療院<コットレンゴ>の患者たちにおける心身の障害という否定性を、やがては否定されて新たな生の豊穡を生み出す肯定的な契機とみなしているのである。

エンゲルスが、唯物論的弁証法における「否定の否定」を、農作物である大麦粒にたとえたことが、私にとってはとりわけ興味深く思われた。この大麦粒のたとえから私が連想したのは、1946年に書かれたカルヴィーノの別の短篇「荒地の男」である(*Uomo nei gerbid*)である(1949年の処女短

篇集『カラスが最後に来る』所収)。登場人物は、丘にウサギ狩りに行く父と息子、丘の荒地に住む男とその娘の四人である。冒頭部分を引用しよう。

朝早く、コルシカ島が見える。その島は、はるかかなたの水平線に浮かぶ、山脈を積みこんだ一隻の船のようだ。ここがほかの村であれば、島の伝説がいつも生まれたことだろう。でも、ぼくたちの村ではちがう。コルシカは貧しい村で、ぼくたちの村よりもさらに貧しくて、そこに行った者など誰もおらず、行こうとすら思わない。朝、コルシカが見えるときは、空気が澄みわたり、雨の降る気配のないことのしるしなのだ。

そんな日のある朝、明け方に、ぼくの父とぼくは、鎖につないだ犬を連れて、コッラ・ベッラの石野原を登っていった。

このあと、狩猟に出かけるさいの父と子のいでたちの差異が詳述され、狩猟にかける父親の意気込みが伝わってくる。ここにもまた、狩猟家でもあった作家の父マリオの姿が反映されていることはたしかだろう。

語り手の「ぼく」が、ウサギが狩り出されるのを待っていると、コッラ・ベッラの荒地にある一軒家から、Baciccin il Beato(幸いな(ベアート)バチッチン)と呼ばれる男が出てきて、言葉を交わす。リグーリア地方の方言で洗礼者(Battista)を意味するBaciccin または Baciccia は、ジェノヴァの守護聖人、洗礼者ヨハネ(Giovanni Battista)にちなむ名前である。

「雨がちっとも降らねえなあ」とバチッチンは言った。

「今朝コルシカ島は見たのかい？」

「見たとも、干からびたコルシカ島が」

「ひどい年だね、バチッチン・ベアート」

「ああ、ひでえ年だ。ソラマメを植えたさ。芽が出たと思うかね？」

「どうだった？」

「さっぱりさ」

「悪い種を売りつけられたんだよ、バチッチン」

「種も悪いし、ひでえ年なのさ。アーティチョークが八株あったさ」

「それはすごいな」

「どれだけ育ったと思うかね？」

「さあ」

「みんな枯れちまったのさ」

「それはひどいな」

戦争が終わったことに懐疑的なバチッチンはこんなことも言う。「おれは戦争が終わったなんて信じちゃいねえぞ。これまで何度もそう言われてきたが、別のやり方でまた始まったことが何度もある」。この言葉には、戦争と政治に翻弄されながら、太古の昔から自然を相手に生きてきた農民の、歴史そのものへの懐疑がある。ただし、カルヴィーノの筆にかかると、不毛の土地で過酷な暮らしを強いられる農民でさえ、どこことなく楽天的でユーモラスに見えてくるのだが。

一粒の大麥は、エンゲルスが留保をつけたように、「それにとって正常な条件を見出し、適した土地に落ちて、熱と湿度の影響を受け」なければ発芽しない。「荒地の男」に描かれているのは、いわば、弁証法以前のアーティチョークなのである。

ここで脱線して、話題をサッカーに移すことを許したい。カルヴィーノは、サッカーが好きだったパヴリーニとちがいが、まったくこのゲームに興味がなかったようなので、よけいに気が引けるのであるが。



【サンブドーリアのロゴマーク】

バチッチン(バチッチャ)は、ジェノヴァのサッカ

一チーム、サンプドリアのロゴマークに描かれた、パイプをくわえた老船乗りの名前でもある。ジェノアとサンプドリアのジェノヴァ・ダービーのとき、ジェノアのファンは、ジェノヴァ民謡の“Baccicin vattene a ca' - to moae 'a t'aspeta”(バチチン、家に帰れ、おまえの母さんが待ってるぞ)を歌ってライバルチームをからかう。

クラブ創立が1893年の古豪ジェノアは、9回のセリエA優勝を誇るが、最後の優勝は1923-24年シーズンまでさかのぼる。一方のサンプドリアは、19世紀後半に創立されたふたつのクラブが1946年に合併してできたチームで、1990-91年のシーズンに1度だけ優勝している。

1986年から87年にかけて、製鉄所の通訳として私は7ヶ月間、コロンプスを生んだこの港町に滞在したことがある。マラッシ地区にあるサッカー専用のルイージ・フェッラーリス・スタジアムで、サンプドリアの試合を日曜日に見るのが楽しみだった。しかし、そのシーズン、ジェノアはセリエBにおり、残念ながら、ダービーは見られなかった。当時サンプには、ロベルト・マンチーニとジャンルーカ・ヴィアツリというふたりの若いエースがいた。1990-91年のシーズン優勝の立役者がこのふたりである。



【ヴィアツリ(左)とマンチーニ】

対戦相手は忘れてしまったが、マンチーニの右サイドからの美しいクロスを、ヴィアツリが強烈なヘディングで決めたゴールを、私は今も鮮明におぼえている。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 in ヴァカンス

内容は当館初級2レベル(近過去、複数形等)

講師: 当館イタリア語講師

日時: 12月23日(木)~26日(日)
10:30~16:30(26日は14:00終了)

参加費: 30,000円(教材費・税込)

会場: 日本イタリア京都会館 本校

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

1/9(日) 13:00~14:30

1/11(火) 19:00~20:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

1/7(金) 19:00~20:30

● 京都本校: 日本イタリア京都会館

1/8(土) 11:00~12:30

1/8(土) 13:00~14:30

1/10(月) 11:00~12:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 1/12(水) 16:00~17:30

会場: 日本イタリア京都会館 本校

講師: 当館スペイン語講師

ポルトガル語無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 1/11(火) 19:00~20:30

会場: 日本イタリア京都会館 本校

講師: 当館ポルトガル語講師

《編集後記》

当会報誌コレンテは2009年4月より約1年、印刷を休止させて頂いておりましたが、前々号より印刷を再開させて頂きました。なお、印刷休止期間中のもも当館サイトに掲載しておりますので、ぜひご高覧ください。

アクセス方法:

当館TOPページ > 文化活動 > 出版活動

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>